

セミナー 2021.9.4 「コロナ禍の障がい者支援の今」

コロナ禍における障がい者の現状と求められる支援

NPO 法人障害者情報ネットワーク尼崎：広瀬 徹

1. 障害者特性によって異なるコロナ禍の災い

- ・視覚障害者への災い

- ・聴力障害者への災い

- ・車いす障害者への災い

- ・精神障害者への災い

2. 共通した困難さ

- ・事業所からのヘルパー派遣の減少

- ・事業所の感染防止策の困難さ

検査の費用負担の増大（抗体キット、PCR 検査）

- ・感染・入院した時の介護体制の困難さ

- ・家族が感染した時の介護体制の困難さ

- ・感染した場合、救急車待機・自宅療養がむずかしい。

※ 幸いワクチン接種は特に障害者に重いという声はきかない。

3. 障害者団体としての対応策

- ・ワクチン接種の重点に上がっていなかったのをあげさせた。

・事業所への支援を強める。聞き取り・訪問を業務と認める。		
・ワンストップの対処要望		
「南北障害者支援センターが窓口」の確認。		
現状：誠実に対処してくれている。		
・「市内障害者関連団体連絡会」「小規模作業所連絡会」を定期的に開いて情報交換。		
特に 上記、1，2 が起こっていないか。 (尼身連・あまかれん・きょうされん など)		
まだ一人の不都合について動いた実例はない。 → 団体の未浸透を意味している。 1 割		
～2割の組織率。		

4. 分かつてきしたことがら

根本的な「危機」は、社会全体がコロナ禍など危機に直面した時、障害者自身・家族・障害者団体・支援者が声をあげないとあとまわしになることがおこるということです。東京のような医療崩壊が起こると、生産性の観点から軽く「障害者軽視・あと回し」の施策が行われる危険性をはらんでいるという事です。すでに東京・大阪では「命の選択」が行われているのではないかと、おそれます。実際に「トリアージ」という言葉が使われはじめています。

*トリアージとは、災害発生時などに多数の傷病者が発生した場合に、傷病の緊急度や重症度に応じて治療優先度を決めることです。

今、わかつてきことは、今度のような社会全体のコロナ禍が起こると、障害者は分断され孤立化していく災いが進行していくということです。

分断され、孤立化する障害者を災いから防いでいるのが、今は障害者団体及び市民団体（広い意味でのNPO（特定非営利活動）です。両者が連携すること、これが「かなめ」だと思いを決め、くるしいときにこそ連携しましょう。小さな連携が「声」に届き支援に結びつきます。

必ず起ころう 「南海トラフ大地震」は 120 分後に尼崎の道路に押し寄せると言われています。ヒタヒタと押し寄せる海から、武庫川からの濁流・藻川からの濁流に、寝たきりのご老人は、近隣から助けの来ない障害者の姿と 2重写しに見えます。尼崎市は大丈夫でしょうか？

120 分もあれば、一人の死者も出さないですむと信じます。

医療不備によって、介護体制の不備によって、コロナによる死亡者を出すことのないよう、今日の集まりのような連携の準備と実際を実現していきましょう。